

「性別不詳」という生き方

倉井香矛哉

一九八一年八月一日の午前一二時一分(米国東部標準時)、若者向けの音楽専門チャンネルMTV (Music Television) が放送を開始された。最初にオンエアされた音楽ビデオは、一九七九年にリリースされ、全英一位の大ヒットを記録したバグルスの「ラジオ・スターの悲劇 (Video Killed The Radio Star)」である⁽¹⁾。この楽曲の歌詞が示唆しているように、ラジオが主要な音楽メディアとしての役割を担っていた一九五〇〜六〇年代からミュージック・クリップによる映像を主流とする一九八〇年代へと移行するに伴い、音楽シーンは根本的な変化をみせた。

この文章では、上述したような一九八〇年代以降の音楽状況をヴィジュアル・ネイティブ世代として位置づけ、グラムロックやニューロマンティック系バンドの隆盛といった系譜を辿りつつ、さらに一九九〇年代以降の日本で流行した小室哲哉プロデュース作品、ジャニーズ系、ヴィジュアル系アーティストの影響を概観した上で、「性別不詳」という生き方の可能性について考えてみたい。……とは云っても、これは半ば個人的なエッセイであり、学術論文めいた

詳しい考察を行うつもりはない。どちらかといえば、自己自身のこれまでの半生を省察することを通して、今後の人生の道行きを見定めたい。そんなささやかな動機に基づいて書かれた断章に他ならない。——以下、まずは個人的なことから。

幼い頃から、自分のことを「オトコ／女」といった枠内で考えることはなかった。それは初等教育における管理体制のなかで参照される個人情報のおひとつにすぎず、一人ひとりの主体的な問題意識においては些細な事柄にすぎない。そんなふうにしてきた。ただ、父親は仕事で長期不在、母親と姉に育てられるという、ちよつと非対称(?)な生育環境のせいか、オトコの人がすこし苦手で、そのせいなのかどうなのか、周囲にとけこめない学校生活を送っていたのは事実である。しかしながら、当時はそのことについて思い悩むわけでもなく、「自分は自分、他人と違って当たり前」程度に思っていた。「みんなで仲良く」といったスローガンには何の意味も見出せず、どちらかというと一人で居ることを好んだ。

しかし、対人関係の希薄であったことがかえって功を奏して、周囲と馴染めないことに起因する困難はほとんどなかった。カセット・ウォークマンの奏でる音楽は、いつでもぼくを一人の世界に連れ去ってくれた。おそらく、ずいぶん内向的な生徒だと思われていたことだろう。学校のなかに居場所はなく、

そうかといって、盗んだバイクで走り出したり、夜の校舎窓ガラス壊してまわったり、といった暴挙に出るほどのストレートさは持てなかった。——きっと本当の悲しみなんて、自分ひとりで癒すものさ⁽²⁾。そう信じていたぼくにとって、一人きりで本を読んだり、鍵盤を叩いたり、と云った時間が学生生活の大半を占めた。他者の存在は、自分とは関係のない外部世界の雑音にすぎないように思われた。ひとたびイヤホンを嵌めれば、周囲の雑多なノイズなどたやすく遮断できる。カセットテープを擦り切らずほどこに繰り返し聴きつづけた音楽は、ぼくの教科書代わりだった。校庭のフェンス越しに眺める体育会系の、——殊に男子生徒たちの様子は、ぼくにとっては別世界の風景に他ならず、誰も彼もがぼく自身とは何ら関係のない別の世界の住人のように思われた。ただ一人、ぼくだけが隔絶しているような不穏な感覚のなかで、何年もずっと生きていた。

しかしながら、そんな学生生活のなかで寂しさの感情を覚えることはなかった。或いは、孤独や寂しさこそが自分にとって似つかわしい感情だと思っていた。ラジオで偶然耳にした洋楽のタイトルをインターネットで検索し、中古CDショップで探しつづける。——そんな学生生活のささやかな余白は、ぼくにとっては充実したひとときに思っていたし、アーティストのホームページやCDジャケット、歌詞カードの写真を通して、八〇年代の奇抜なファッション